

2 1 世紀の日本のかたち（4 1）

随想 ー 武士の都・鎌倉 ー



戸沼幸市
〈(財)日本開発構想研究所 理事長〉

1. 東国への首都移転 ー 鎌倉

春の一日、奈良・京都に続けて、首都移転の歴史を追って、中世に東国武士団が打立てた都、鎌倉を散策してきました。鶴岡八幡宮の入口にあった樹齢800年とも1000年余ともいわれ様々な歴史を見つめてきた大銀杏（公暁の「隠れ銀杏」ともいわれている）は、昨年（2010年）3月の強風のために根元から折れてしまいましたが、地面に残った根の部分から約2mの高さに育った幼木「ひこばえ」が出ておりました。

鎌倉は太平洋に向けて突出し、相模湾と東京湾を隔てる三浦半島の付け根に位置しております。

現鎌倉市の中心市街地は、南は由比ヶ浜、北、東、西の三方は標高100m程の丘陵に囲まれた袋型の平地にあり、幕府のあった中世都市鎌倉もほぼ同じ範囲であったと考えられております。

昭和23年の市町村合併で市域は大きく拡大し、人口は17.4万人（平成23年5月1日現在）ほどです。袋の中の現在の中心市街人口はほぼ6万人で、中世鎌倉の人口を3万人～5万人とすると、さほど変わっていないのです。（河野真知郎は最盛期中世鎌倉の人口を5万から10万人とみなしている。）

地理地形の制約から鎌倉の場合、近現代の大

規模開発は不向きです。バブル経済期の昭和30年代後半、鶴岡八幡宮裏山の宅地開発計画が持ち上がった時に、市民からわきあがった反対運動（いわゆる「御谷（おやつ）騒動」：昭和39年）が起きました。これが端緒となって、日本固有の文化的遺産として今後とも継承していくべき古都における歴史的風土を保全する「古都保存法ー古都における歴史的風土の保全に関する特別措置法」が議員立法により昭和41年に制定され、同年12月14日に鎌倉をはじめ京都、奈良、斑鳩が対象都市（歴史的風土保存地区）になりました。



- ① 大倉幕府(1185-1225)
 - ② 宇都宮父子幕府(1226-36)
 - ③ 若宮幕府(1236-1333)
 - ④ 政所
 - ⑤ 問注所(推定地)
 - ⑥ 足利氏鎌倉御所(1449-1455)
 - ⑦ 山内上杉氏邸(管領屋敷)
 - ―― 外郭線
- 原図作成ー宮田真・大三輪龍彦

中世の鎌倉

資料：「かまくら（鎌倉市）」（平凡社大百科事典）2003

原地形が守られている古都、鎌倉は、わかりやすい都市です。まず山と海に囲まれ、境界が

明確です。そして市街地をほぼ南北に貫く都市軸―若宮大路があります。若宮大路の突当りの階段を登ると、山を背面に鎌倉武士（源氏）の守護神を祭る朱色の鶴岡八幡宮（鎌倉幕府の宗社）があります。



朱色の鶴岡八幡宮

初期の源頼朝邸＝大倉幕府（1180（治承4）年～1225（嘉禄元）年）の跡地は学校用地などになり石碑などに位置を示すに留めておりますが、その近くに頼朝の墓が立っております。



源頼朝の墓

古都鎌倉の政庁（幕府）や当時の武家屋敷、町屋は、近現代の都市風景にすっかり取って代わられましたが、大路小路の街路や、市街地からの出入口である7つの切通し（やと）が残っており、高さ制限の効いた市街地景観が保たれ、全体として、中世都市鎌倉の雰囲気を感じることができます。

そして、丘陵と谷筋に所を得た、中世からの

寺社が数多く残っているのです。

私も改めて大勢の寺社巡りの観光客に混じって、古都の求心点をなす鶴岡八幡宮、鎌倉の鬼門の押さえ笹柄神社、中国の僧を迎えて建てられた日本最初の禅宗寺道場といわれる建長寺、頼朝の妻、北条政子が建てた寿福寺、そして鎌倉大仏を拝観しました。

鎌倉の大仏は、大というよりは中仏で、拝観者（民衆）とアイコンタクトの出来るような親しみ深い造形です。寺社巡りの後、夕日に沈む早春の海を眺めながら、由比ヶ浜を散策し、源頼朝も見たであろう、三浦半島を越して房総丘陵を眺めたことでした。



鎌倉大仏

現在の鎌倉の市街地は、鉄道（JR横須賀線）が横切っておりますが、中世からのヒューマンスケール（人間的尺度）が感じられます。

若宮大路を挟む現在の中心市街地の建物は鶴岡八幡宮の石段の最上部以下に抑えられており、周りの丘陵地の緑が立面となって街を取り囲んでおります。（鶴岡八幡宮の鳥居より高くしない。）

現在、鎌倉市などは源頼朝の開いた平氏政権に次ぐ朝廷から独立した本格的な武家政権発祥の地、古都鎌倉を丸ごと世界遺産に登録しようと運動しています。対象を個々の建築的施設ではなく、中世都市の構造そのものとしていると

ころがユニークです。

2. 鎌倉の立地選定と都市計画

源頼朝が京の王権と一定の距離を置くように、三浦半島の付け根、鎌倉の地に幕府を開いたことについての理由がいくつか考えられます。

- ・平安時代中期以来、源氏の支配地であり、源頼朝ゆかりの土地である
- ・三方が山に囲まれ南に海があり、戦乱の時代、防衛上の適地である
- ・水（滑川）と一定の平地があり、数万人の居住地が確保可能である
- ・中世に発達する人や物の交通、流通路の要であり、特に相模湾に面し、海路を重視しうる立地である
- ・西国旧勢力に対抗対峙しつつ、三浦半島から房総の国々を眺望でき、東国を束ね、武家集団を焦点化する絶好の位置である



中世鎌倉模型

この立地特性に呼応してつくられた都市計画は、三方の山を城壁に見立て、その中にコンパクトに城塞都市をまとめることでした。

- ・外部との交通連絡は7つの切通し（やと）

に限定

- ・中心都市部の街区構成は京都（平安京）をモデルにして、南北中心軸に若宮大路を設定し、西、東に、格子状の街路、街区を想定し、武士の館、町屋などを配置
- ・主たる施設配置は若宮大路の北の奥に幕府の守護神、鶴岡八幡宮（神社であると同時に、政治の舞台）を配置
- ・幕府の執務所、大倉御所、若宮大路御所などは、若宮大路の東側に配置、これは西からの攻撃の備えともなる
- ・交通計画は、中世の人、物流の進展に配慮、特に海路を重視し、日本最初の築港「和賀江嶋」がつくられている
- ・寺社を配置する



満潮時には海中に隠れてしまう和賀江嶋

武士の都においても権力の権威づけとして寺院や神社は欠かせない宗教施設です。鎌倉においては多く市街地の外側の丘陵地、谷間に展開されました。

寺社が時間の経過とともに数を増し、それぞれに独特な宗教空間をつくり出しましたが、とくに鎌倉にあつては武士と結びついた禅寺などがあり、奈良や京都の寺院と一味異なったものと見受けられます。寺社建立の効用は中世庶民、民衆の病や天然の災害、飢饉、生から死に向かう人間の肉体と精神の救済装置として、統治者

の施策上不可欠の空間でした。

3. 中世の首都 鎌倉成立の時代背景

中世は日本の歴史の大転換の時代でした。壇ノ浦の戦いに平氏一門が滅亡した4か月後の1185（元暦2）年7月9日（＝8月13日）に京都一帯が大地震（文治京都地震：M7.4）に襲われているのです。余震が2か月ほど続くことなどその惨状と世情の乱れを鴨長明は方丈記に克明に記録しています。

それから十年を待たぬうちに鎌倉幕府が成立（1192（建久3）年：征夷大將軍の宣下）し、以後、日本の歴史に武士が前面に出ることになりました。武士の時代は明治の近代国家の成立（1868年）までとすると、実に700年にもなります。現在（2011年）を含む、日本の近現代はようやく1.5世紀（143年間）です。この間の日本の大まかな人口は、平安末期（1150年）700万人弱、徳川初期（1600年）1,200万人強、明治初年（1873年）3,300万人と見積もられています。

鎌倉時代（1192～1333）に始まる中世の歴史は、日本の人口が1,000万人を超える時代の物語ということになります。この人口を基本的に支える食糧生産、稲作を中心とする、全国的（関東東北を含む）農業生産の向上、展開がありました。

このことは古代における畿内中心の国家経営を超える領域に「国家」が広がることであり、新しい統治機構を必要としました。中世は農業生産の向上により、利用価値が上がった地域に築かれる生活圏が全国に不連続に多数出現しました。これら地方、地域の村的・生活圏に対する武力を持った守護者が地頭、武士であり、土地を巡る争いと戦いの場面で力をつけた強力な武士集団の頂点に立ったのが、まず源頼朝であり、

それが鎌倉幕府の成立につながりました。

古代から中世への歴史の転換を特色づけるものとして交通、流通網の全国的広がりがありません。

陸路に加えて、朝鮮、中国ともつながる海路、海運が発達しはじめました。人流、物流は同時に重要な情報網でした。

源氏三代と北条執権の鎌倉時代、室町時代、群雄割拠、織豊時代と、日本は天皇の居所である京都を政治の虚中心点とし、実の政治中心を西から東へと移動させたのでした。

4. 21世紀の日本の首都の行方

日本の政治中心―首都は、歴史的に西から東へと移動しました。

古代―平城京（奈良）、平安京（京都）、中世―鎌倉、吉野（京都）、室町（京都）、近世―安土・伏見・大阪、江戸、近現代―東京です。

いずれも大きく変化する時代状況を反映し、国のかたちを焦点化するように遷都が行われています。

さて、21世紀の日本の首都は東京で在り続けるのでしょうか。我が国を取巻く状況は、人口減少、少子超高齢化、グローバル化など、激変しているのです。

今、日本の統治機構として、中央政府と都道府県、市区町村の在り方が問われております。地域からは地方主権、地域主権が唱えられ、道州制の議論も続いております。最近では東京都に対し、大阪都、中京都を旗印に地方分権を唱える地方政治の動きもあります。今の時代状況は、中世の地方を拠点とする武士集団の台頭、群雄割拠に似ていなくもありません。

社会経済、政治状況の大変化の中で、21世紀の日本として首都はどうあるべきか、依然とし

て首都移転の議論が残ります。

東京（圏）一極集中、東京巨大集合に対する地震などの災害対策の脆弱性にどう対応するか、東京首都の分都、展都、重都あるいは分権的国土構造のシンボル事業として、小さな新都建設などが考えられます。

鎌倉を視点に「21世紀の日本のかたち」を書き終えた直後、2011年3月11日、東日本大震災（M9.0）が起き、東北地方太平洋沿岸部の集落や都市は想像を絶するほどに一挙に壊滅しました。この21世紀初頭、日本の国のかたち、首都の在り方を改めて検討すべきと考えます。

注：断りのない文中に掲載の写真は戸沼撮影

【参考文献】

1. 『人口から読む日本の歴史』 鬼頭宏著 講談社学術文庫 2000
2. 『武士の都 鎌倉』 石井進 大三輪龍彦篇（『よみがえる中世[3]』） 平凡社 1989
3. 「かまくら（鎌倉市）」 石井進（『平凡社大百科事典』） 2003
4. 『京・鎌倉の王権』 五味文彦篇 吉川弘文館 2003

(2011. 5. 15)

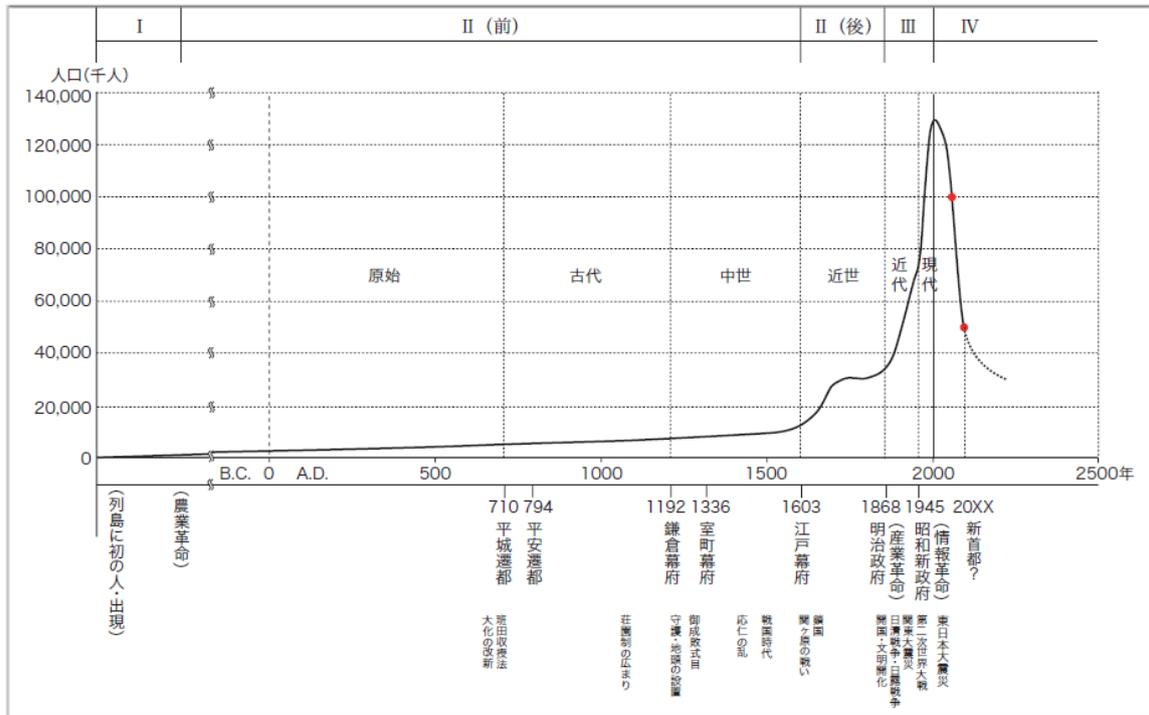
歴史的な首都移転と21世紀の首都移転仮説



注：赤字部分は筆者が加筆した。

資料：「国会等移転審議会答申」平成11年12月20日移転審議会参考資料

人口動態に見る日本文明史の区分



(戸沼幸市作成)